

宇宙科学・探査ロードマップ

2021年 1月20日 B改訂

2019年 5月16日 A改訂

2013年 9月19日 制定

国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構
宇宙科学研究所

目次

I. はじめに

II. 宇宙科学・探査プログラムの進め方の
基本となる考え方

III. 今後の宇宙科学プロジェクトの推進方策

IV. 各分野の将来構想検討

I. はじめに

宇宙科学・探査ロードマップは、宇宙科学・探査の今後の計画を俯瞰し、戦略性を持って今後の計画を策定するために、宇宙科学研究所が作成するものである。

宇宙科学・探査プログラムを進めていく中で、2020年(令和2年)6月の宇宙基本計画改訂とともに、ミッション立上げをよりスムーズに行いリスクを低減するためには、

- ・ 戦略的中型計画の戦略的なミッションの選定
- ・ 公募型小型計画の公募の多様化、タイムリーな打上げによる成果創出
- ・ 国際協力ミッションにおける戦略的・計画的な海外機関との調整
- ・ 基幹ロケットに対するアンカーテナンシー
- ・ プロジェクトのコストオーバーラン対策

の必要性が明らかになってきた。

これらの状況を踏まえ、宇宙理学・工学委員会及び宇宙科学・探査小委員会にて検討と議論を進め、その結果をもとに宇宙科学研究所が本ロードマップの改訂を検討し、結果をB改訂として制定する。

Ⅱ.宇宙科学・探査プログラムの進め方の基本となる考え方

宇宙科学は、宇宙空間でのその場観察や探査、及び、宇宙空間からの宇宙観測により、地球と太陽系の起源、宇宙の物質と空間の起源、宇宙における生命の可能性探求に、新しいパラダイムをもたらすような人類の知の資産創出を目指し、同時に探査機・輸送システム等の宇宙工学技術をパラダイムシフト的な革新を目指して先導する。

また、昨今の米国による有人月面着陸構想や有人月周回拠点(Gateway)計画など、活発化する国際宇宙探査活動への効果的な参加も考慮する必要がある。

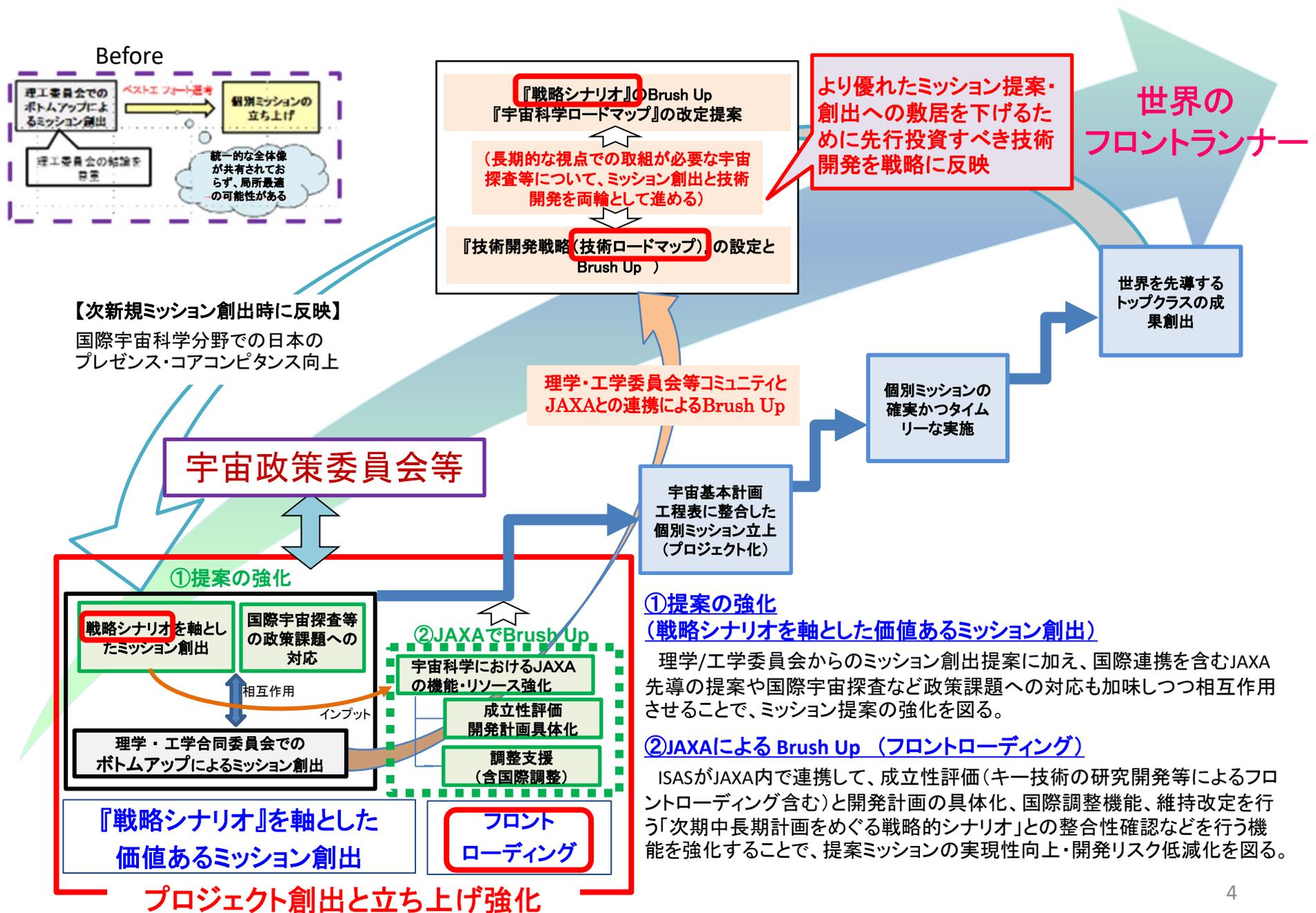
こうした最新の状況も踏まえつつ推進する宇宙科学・探査の研究開発や成果は、宇宙分野だけでなく幅広い分野の科学技術を牽引・強化するとともに、大学等の連携による人材育成、民間等との協力による産業力強化、人類の活動領域の拡大を含む国力の維持・強化に資するものである。

これまでの日本の宇宙科学の実績と特徴を生かしつつ、宇宙科学の目的とその獲得に必要なリソースを厳しく見極め、適正規模のミッションをタイムリーに実施することを推進する。

特に日米欧三極間での国際協調と相互補完により効率的なミッション計画を立案し実行する。世界を先導する事を期待される分野においてはフラッグシップ的ミッションを主導し、一方で、海外が主導するプロジェクトについてはそれへの参加を積極的・戦略的に展開し、成果創出の最大化を図る。

宇宙科学ミッションの高頻度な実施を図る。その際、イプシロンロケット等我が国の基幹ロケットの優先的使用を含めて検討を進めるとともに、宇宙機小型化技術の活用による効率化、活動範囲の拡大も狙う。

II. 宇宙科学・探査プログラムの進め方の基本となる考え方



Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

(1) 方策

今後5～10年間に選定する計画について、現在から続く宇宙科学のスコープにおける、総予算規模、基幹ロケットのアンカーテナンシー、国際協力の制約等の条件の下で、特に顕在化している、業務改革を踏まえたコスト超過、海外協カリスク、人的リソース不足等の課題を抑制し、宇宙科学の成果の最大化と持続的な発展を得るため、宇宙科学コミュニティが責任を持って実行すべき施策として、以下を行う。

- 宇宙科学における宇宙理工学各分野の戦略に基づき、戦略的中型計画(H3クラスで打上げを想定)、公募型小型計画(イプシロンで打上げを想定)、戦略的海外共同計画、小規模計画の4クラスのカテゴリーに分けて実施する。
- コストキャップの機会毎の弾力的な設定とコスト超過抑制策の導入を合わせ、10年間にH-IIA/H3ロケット3機、イプシロンロケット5機の打上げ機会を維持することを目指す。
- 「戦略的中型計画」は、宇宙科学コミュニティと宇宙科学研究所の開かれた関係と協力のもとで「戦略的に」ミッション候補について立案を行い、「技術のフロントローディング」の活用を含め、集中的・効率的にリソースを投下してミッションの立案・開発を行う。

Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

- 「公募型小型計画」については、開かれた機会は維持しつつ、戦略的な技術獲得やイプシロンの成長戦略とも整合する「公募の多様化」によるミッション選定を実施する。
- 段階的なコストキャップとコストマージンの設定などの工夫や、コスト抑制のための組織的な対応を施策として行うことをすすめ、より効率的に成果獲得を目指す。
- 戦略的海外共同プロジェクト、小規模計画をさらに充実し、より多くの柔軟な機会を提供する。
- 国際協力によるミッションは、機関間の事前調整を十分に行う。

Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

(2) リスクの抑制

業務改革を含むコストの増大、海外協力も含むマネジメントリスクに対応するため、プランに実行性を持たせる次のような施策を実施する。

- 技術的戦略やペイロードの工夫により、コストキャップが小さくなる計画・公募も実施する。
- 公募型小型計画の公募においては、段階的なコストマージンとコストキャップを設定することで、コスト超過・海外協力を含むマネジメントリスクを抑制し、また、コスト抑制に対するインセンティブを明示的に設定する。
- コスト評価を早い段階から一元的な手法を導入して行うよう、宇宙研の体制・仕組みを整える。
- 要素技術、システムズエンジニアリング技術などの専門的技術の蓄積と活用を組織的に行う。
- 戦略的中型計画における海外協力については、より立案・開発の早期の段階でミッション候補を絞り込むことにより、戦略的・計画的な海外機関との調整を可能とする。

Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

(3) ミッションカテゴリ

カテゴリ	目標	実施方針
戦略的に実施する 中型計画	世界第一級の成果創出を目指し、各分野のフラッグシップ的なミッションを日本がリーダーとして実施する。多様な形態の国際協力を前提。	<ul style="list-style-type: none">➤ JAXA戦略的中型計画は、コンセプト公募からのダウンセクションという完全な公募型の選定方式を改め、宇宙科学コミュニティと宇宙科学研究所による「戦略的」なミッションの立案と実施プランに則り行う。➤ 前提として、注力すべき分野・対象・手法を発案する議論は広く行い、また、候補となるミッションコンセプトのコスト・体制を含む成立性、開発リスク、海外協力の実施についての段階的な検討を組織的に行う。➤ 技術のフロントローディングを有効に活用し、戦略的中型計画の実現に資する開発研究をタイムリーに行う。➤ 当面(5-10年内の選定)の頻度については、アンカーテナンシーを前提に、また、総予算規模のもとで必要十分な頻度を目指す。コストプランについては、戦略性に則りミッション毎に適性な予算規模(<u>真に必要な場合を除き、最大400億円程度</u>)を検討し、プロジェクト準備審査・プロジェクト移行審査において設定する。

Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

カテゴリ	目標	実施方針
公募型 小型計画	従来の公募小型計画の推進方策に加え、地球周回軌道からのサイエンスを適正規模のミッションでタイムリーに実現する一方で、衛星探査機の小型化・高度化技術などの工学課題の突破から惑星探査への展開も図り、高頻度な成果創出を目指す。	<p>宇宙科学コミュニティと宇宙科学研究所の開かれた関係と協力の下で、以下の施策を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 宇宙科学コミュニティの多様な分野からのミッション提案を募る上での開かれた機会は維持しつつ、公募毎の一定の条件を課すなど、画一的な運用から「公募の多様化」を図る。 ➤ 総予算規模をふまえつつコストキャップも公募毎に設定する。コストキャップ設定（<u>真に必要な場合を除き、最大180億円程度</u>）に当たっては、現在の公募型小型計画のコストプロファイルの分析を踏まえて適正に行う。 ➤ 戦略的な技術獲得やイプシロンロケットの成長戦略とも整合するよう、計画化を図り、それに見合う公募の機会を設定するなど、公募の多様化に反映する。

Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

カテゴリ	目標	実施方針
戦略的海外共同計画	海外ミッションへのパートナーとしての参加や国際宇宙探査の観測機器の搭載機会等を活用するなど、多様な機会を最大に活用し成果創出を最大化を図る。	戦略的海外共同プロジェクトの立案・選定にあたっては、コミュニティと宇宙科学研究所の協力の下にこれを行う。
小規模計画	小規模計画国内外の研究者の幅広い提案を公募し、海外の観測ロケット・大気球、国際宇宙ステーション(ISS)などの飛行機会を利用するなどした計画を推進。	他の3つのカテゴリと相補的に他では実施できない飛行機会を提供する仕組みとして小規模計画カテゴリは妥当である。小規模計画の性格をより明確に定義しつつ柔軟で多様なミッション機会を提供する。

Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

(4) 予算規模

- 学術研究を目的とした宇宙科学及び宇宙探査に関する活動を対象とし、1年単位の予算規模での考え方では効率的かつ効果的なミッション創出や国際共同の妨げとなる可能性が有るため、プログラム化を考慮し10年程度の規模での予算枠を前提として考える。これにより、以下の項目を実施するためには年間一定の予算規模が必要と推算されるが、衛星開発スケジュール、JAXA全体の予算規模等により各年度予算は変動することに留意が必要である。
宇宙科学コミュニティとの調整により、学術として十分な意義かつ成果が見込まれる等の理由により、各カテゴリの個別プロジェクトにおいて予算規模を超過する場合は、10年間の全体の予算規模の中での調整が必要となり、最終的にはコミュニティの意見を踏まえつつJAXAが決定する。
- 4つのカテゴリの規模
総予算規模を考慮しながら、以下のとおり設定する。
 - ・戦略的に実施する中型計画 : 真に必要な場合を除き、最大400億円程度／機、
10年間に3機
 - ・公募型小型計画 : 真に必要な場合を除き、最大180億円程度)／機、
10年間に5機
 - ・戦略的海外共同計画 : 10億円／年 程度
 - ・小規模計画 : 数億円／年 程度

Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

➤ 予算規模の範囲について

以下の基盤的な活動費を含む。

- ✓ 学術研究・実験等(観測ロケット・大気球、大学共同利用・大学院教育運営を含む)
- ✓ 軌道上衛星の運用
- ✓ 宇宙科学施設維持

- これらを推進する上で、人材育成、民間との連携を考慮し、JAXAは大学・他の研究開発機関等と連携し、学生、若手研究者が宇宙科学・探査プロジェクトへ参加する機会を提供する。
- 具体的には、リサーチアシスタント(RA)制度等の充実によって学生の研究やプロジェクトへの参加を促す機会を増やし、次代の人材の育成/民間への人材輩出・活力向上に積極的に貢献をしていく。
- プロジェクトやフロントローディングを通して、ISAS/JAXAに知見が少ない技術分野は、ALL-JAXAによる対応や大学連携拠点を中心とした連携強化に加え、大学や産業界からのクロスアポイントメント等の連携を進めて研究開発を行い、それらを通じて人材育成を図るとともに民間参入を促進する。
- また、民間等との連携を進める上で、研究資金の分担等(パテントの活用含む)、多様な外部資金獲得強化も併せて推進する。

Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

➤ コストキャップの考え方

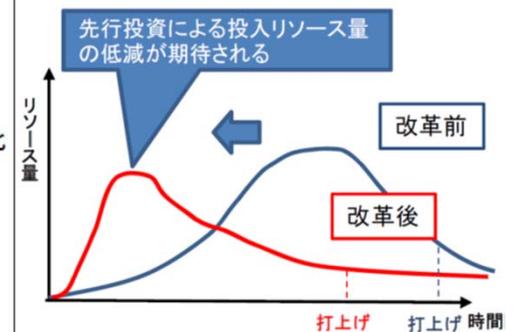
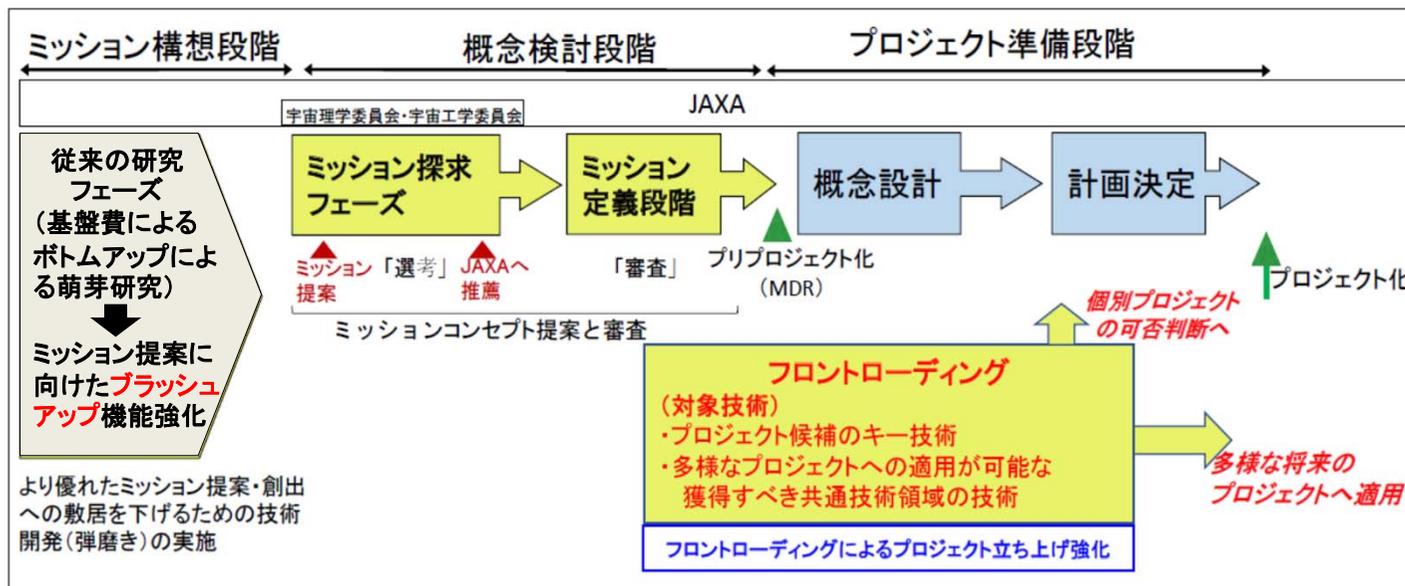
宇宙研のリソースを最大限有効に活用して宇宙科学・探査で世界的な成果を出していくため、以下のとおり進める。

- ① プリプロジェクト候補は、ミッション定義段階にフロントローディング活動を行い、確実性強化、リスク低減、及びコスト見積もり精度向上を図る。
- ② ISASは、ミッション定義段階に、上記に必要なリソースを投入し、また、独立した第三者によるコスト評価を行い、コスト管理を徹底する。コスト超過が見込まれるミッションは早期にデスコープ等によるコスト削減を行ってコストキャップ内に抑える。
- ③ 上記努力にも関わらずコスト超過が発生した場合、ミッションの意義価値と増加コストの両者を勘案し、宇宙理工学委員会の意見を踏まえつつ、推進、縮小、中止等をISAS／JAXA経営が判断する。
- ④ コスト見積もり精度向上・コスト評価・ダウンセレクションを経てから予算要求を行う。

Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

(5) フロントローディング

- ミッション創出機能強化(プロジェクト立ち上げ強化)
 - ✓ 従来の学術研究の一部であるボトムアップによる萌芽研究・基礎研究機能の強化
 - ✓ フロントローディングとして、プロジェクト候補のキー技術や多様なプロジェクトへの適用が可能な獲得すべき共通技術領域の技術の開発を推進。



Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

国際宇宙探査との連携(1/2)

1. はじめに

国際宇宙探査と宇宙科学探査は密接な関係にあるため、共通技術開発等可能な限り連携・協力を図りつつ推進することが重要である。

2. 宇宙探査の定義

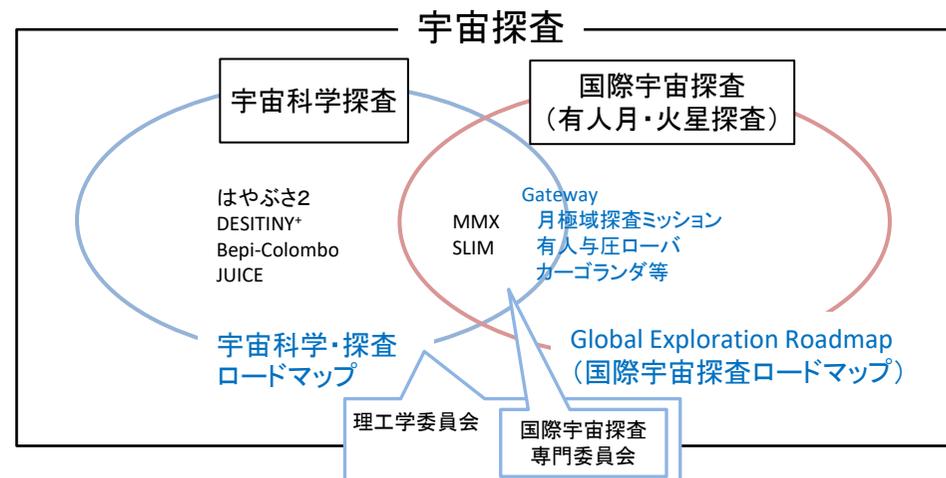
宇宙探査における国際宇宙探査と宇宙科学探査を次のとおり定義する。

- 国際宇宙探査

天体を対象にして国際協力によって推進される有人宇宙探査活動及び当該有人探査のために先行して行われる無人探査活動。人類の活動領域の拡大を主目的として全体シナリオにそって推進され、当面は月、火星を対象とする。

- 宇宙科学探査

宇宙科学(理学・工学)を目的としてコミュニティがボトムアップにより立案する探査。月、火星に限らない。



Ⅲ. 今後の宇宙科学・探査プロジェクトの推進方策

国際宇宙探査との連携(2/2)

3. 宇宙科学探査の位置付け

探査は、科学(探査)と分けて使う場合に用いられることがあるが、宇宙科学探査の位置づけは、科学が主目的の探査である。一方、国際協力や国際協働によって推進される国際宇宙探査では、科学は目的の一部となる。

(1)科学は国際宇宙探査の目的の一部である。

(2)場合によっては科学が主目的となる場合もあるが、それは全体シナリオに沿った探査である。

国際宇宙探査への科学の関わり方のレベル

<科学からの貢献>

- ・科学探査による理学的・工学的知見の提供
- ・国際宇宙探査の意義・価値の向上

<科学への活用>

- ・国際宇宙探査に向けて開発された技術や施設の利用
- ・多種多様な分野からの研究者の参入

4. 国際宇宙探査への科学の参画

ミッションに興味を持つ研究者の参加を促進して科学的意義の高い成果の創出につなげるために、科学として計画立案の段階からの参画が必要である。

IV. 各分野における将来構想検討

1. 天文学・宇宙物理学分野

2. 太陽系探査科学分野

3. 宇宙工学分野

以降は、各分野について「分野全体を俯瞰する将来ビジョン」、「日本が採るべき戦略」、「2040年を視野に入れた目標」、「今後10年程度の目標」の検討状況であり、今後も議論を行い更新をしていく。

1. 天文学・宇宙物理学分野の将来構想(1/2)

■ 分野全体を俯瞰する将来ビジョン

大目標:「宇宙の空間と物質の起源の理解」「宇宙における生命の可能性の探求」



宇宙観測の利点を用いて次の課題に挑む。

- 我々の宇宙の成り立ちの理解にかかわる課題:
宇宙の時空間と構造の起源（インフレーション、宇宙の加速膨張）、多様な天体の形成過程（銀河の形成、星・惑星の形成、元素合成）、宇宙における生命の可能性（太陽系外惑星）など。
- 物理学の根幹にかかわる課題:
素粒子論と物質の根源（暗黒物質、中性子星）、一般相対論の検証（暗黒エネルギー、ブラックホール、重力波）、極限状態の物理学（プラズマ過程、粒子加速、分子・固体形成）など。

1. 天文学・宇宙物理学分野の将来構想(2/2)

■ 日本が採るべき戦略

- 戦略的中型、公募型小型、海外計画参加を含む小規模計画などのミッション機会を、柔軟かつ適正に組み合わせることで持続的な発展を目指す。
- 中型ミッション機会を戦略的に利用し、宇宙構造の起源・原始重力波・ハビタブル系外惑星といった宇宙の成り立ちと物理学の根幹に関わる課題に挑戦する。
- 公募型小型機会を利用し、科学目的を絞った先鋭的ミッションを実施することで、強みとなる技術の発展的応用および挑戦的な技術の獲得を戦略性を持って進める。
- 冷凍機技術といった国際的優位性を保つ技術を強化するとともに、将来ミッション像に合致した応用性の高い技術領域を同定して技術開発を推進する。

■ 2040年を視野に入れた目標

- 国際協力を通じて、太陽系外惑星における生命可能性の探査といった超大型望遠鏡・観測装置が必須となる大型計画へ参加の実現を目指す。
- 原始重力波の直接観測を目指すミッションや銀河・惑星・ブラックホールの誕生過程を解明するミッションなど、我が国の優位性を活かした新機軸の宇宙物理観測・実験ミッションを世界に先駆けて実行する。

■ 今後10年程度の目標

- XRISM、LiteBIRD、小型JASMINE、HiZ-GUNDAMを我が国主体で進める。
- Nancy Grace Roman宇宙望遠鏡、ATHENA、LISAといった海外ミッションへ参加する。
- 他研究分野との協力によるWSO-UV、SILVIAを実現する。

2. 太陽系探査科学分野の将来構想(1/3)

■ 分野を俯瞰する将来ビジョン

大目標: 「太陽系と生命がどの様に生まれ、進化して、現在に至ったかを解明する」

• 惑星科学(固体惑星, 始原天体): 【太陽系の形成・進化】

太陽系形成過程を物証に基づいて明らかにするとともに、太陽系における惑星材料物質の進化・移動過程を探る。

• 太陽圏システム科学(太陽物理、磁気圏プラズマ物理、惑星大気科学): 【太陽系の現在環境】

太陽活動の起源および太陽のプラズマ現象を理解し、磁場の起源と変動に迫る。宇宙天気予報を実現し、月や火星など人類の活動圏拡大を支え、地球環境への長期影響を解明する。太陽活動により変動する太陽圏・惑星圏環境を理解し、惑星大気プラズマのダイナミクスと進化を解明する。太陽系と系外惑星系の知見を融合させ普遍的な生命生存可能環境を理解する。

• アストロバイオロジー: 【生命の形成・進化・現在】

太陽系における生命起源物質の進化・移動過程を理解し、地球外での生命活動の可能性またはその痕跡を探る。太陽系そして系外惑星における前生命環境およびハビタビリティ(生命圏の持続条件、人類の居住可能性)を解明し、人類の活動圏における生物多様性の保全に資する。



2. 太陽系探査科学分野の将来構想(2/3)

■ 日本が採るべき戦略

- 適正規模の太陽系探査を高頻度で実施し、日本独自の技術や観測機器の実証を系統的に行える枠組みを構築する。
- 国際的な優位性を持つ太陽物理・磁気圏プラズマ分野は、日本独自ミッションだけでなく世界の動向を踏まえた国際協力をさらに積極的に推進する。
- 始原天体探査は、世界におけるリーダーシップを意識し、はやぶさ・はやぶさ2の実績を発展させ国際的な優位性を確立する。
- 物質科学探査については、国際協同プロジェクトおよび我が国のサンプルリターン計画を通して独自の探査手法を構築し、本格的な生命探査ミッションを立案・実施する。
- 日本では実施できない規模の海外主導ミッションへの参加を推進する。
- 我が国におけるチャレンジングで高度な深宇宙探査ミッションを実現する上で必要となる、惑星保護(探査対象天体の保全および地球環境保護)に係る技術的な蓄積を行う。惑星周回探査や重力天体着陸探査については、国際宇宙探査と連携しつつ理工連携により独自の探査手法を構築し、欧米とは差別化された本格的探査を立案・実施する。

■ 2040年を視野に入れた目標

- 宇宙物質科学や惑星系形成論、アストロバイオロジーの進展と並走しつつ、小天体探査(地球接近小惑星、彗星、トロヤ群小惑星など)を実施する。
- 国際宇宙探査と連携して、月の水・資源探査や、火星のサンプルリターンおよび気候・水環境探査を実施する。
- 太陽系内生命環境の理解に向け木星・土星衛星リモート観測や直接探査、サンプルリターンを実施する。
- 太陽の磁気プラズマ活動の本質を探るための超高解像度撮像を行う、太陽圏における多点観測機会を最大活用する等の方策から、太陽活動とその太陽圏への影響というテーマの探求を進める。
- 地球に加えて小天体から岩石・ガス・氷惑星のあらゆるスケールにおけるプラズマ環境を超小型・小型編隊飛行衛星群を用いて探査し、地球から惑星圏まで広がる宇宙天気・天体環境の解明を目指す。
- 宇宙物理分野と連携し、太陽系科学分野で培われた技術を系外惑星大気観測に応用することで「生命存在可能環境の解明」を目指す。

2. 太陽系探査科学分野の将来構想(3/3)

■ 今後10年程度の目標

- 始原天体探査において世界をリードしつつ、積極的に国際共同計画にも参加する。
→MMX、DESTINY⁺、Hera、Comet Interceptor
- 国際宇宙探査と連携しつつ月着陸探査および火星気候・水環境探査を実施する。
→SLIM、LUPEX、UZUME、MACO/Ice Mapper
- 日本が強みをもつ技術を活かした木星・土星衛星探査を実施する。
→JUICE、Dragonfly、氷衛星プリューム探査
- 国際的優位性を活かした地球・小天体プラズマ環境探査を実施する。
→BepiColombo、FACTORS、GEO-X、JUICE、Comet Interceptor
- イプシロン規模で太陽の磁気プラズマ活動の本質を探る。
→Solar-C (EUVST)、PHOENIX
- 海外の大型宇宙望遠鏡計画に参画し系外惑星大気環境を探る。
→WSO-UV

3. 宇宙工学分野の将来構想(1/3)

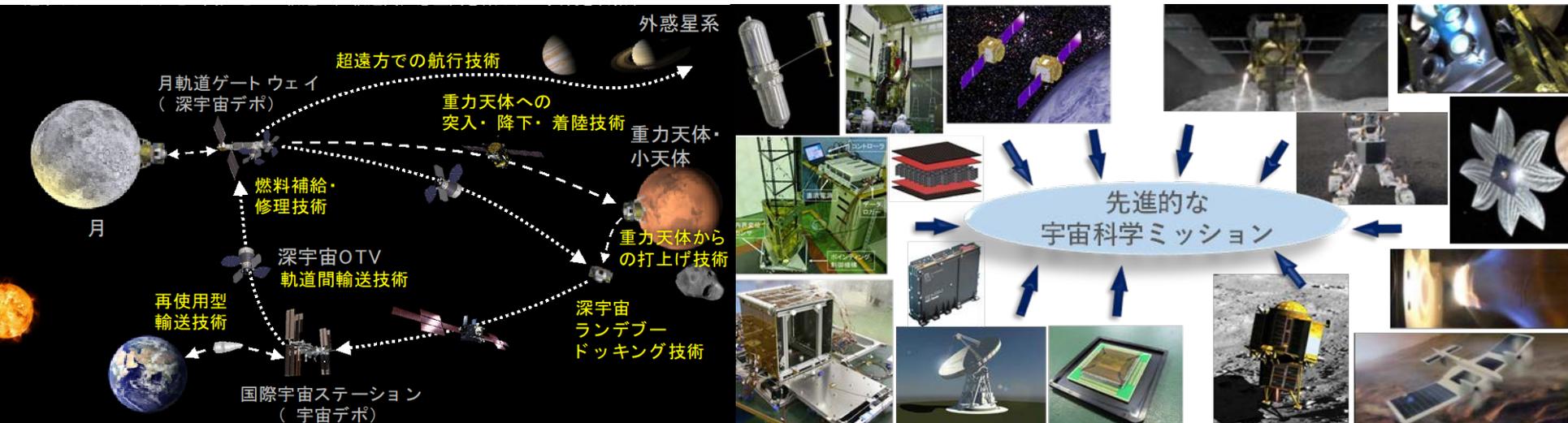
宇宙工学研究を創造的・実証的に遂行し、より広範囲へ・より自在に航行できる宇宙航行・輸送システムを獲得すると共に、より多面的かつ高度な科学観測や探査活動を実現することにより、宇宙開発全体の将来に向けた貢献や人類的課題の解決に向けた先駆けとなる事を目指す。

■ 宇宙航行・輸送系の分野全体を俯瞰する将来ビジョン・大目標

- 宇宙航行・輸送コミュニティ全体で、太陽系内のより広い範囲を自在に航行するための輸送系ネットワーク(地上間、地上＝軌道上、軌道間、惑星間を繋ぐ)の実現を目指す。

■ 探査機・衛星系の分野全体を俯瞰する将来ビジョン・大目標

- 中型による高度なミッションと小型・超小型によるタイムリーで高頻度でなミッションの組み合わせにより、技術的に挑戦的なミッションを積極的に実行し、日本の存在価値を最大限発揮する。



輸送系ネットワークのイメージ図

高度なミッション/タイムリーで高頻度なミッションを支えるキー技術

3. 宇宙工学分野の将来構想(2/3)

宇宙航行・宇宙輸送分野の将来構想

■ 日本が採るべき戦略

- 輸送系ネットワークの実現に向けて、宇宙航行・輸送コミュニティを牽引・拡張・育成し、クリティカルとなる工学的課題に集中する。

■ 2040年を視野に入れた目標

- 輸送系ネットワークを構築する上でクリティカルとなる「再使用型軌道宇宙輸送技術」、「深宇宙ランデブードッキング技術」、「燃料補給・修理・製造技術」、「重力天体への大気突入・降下・着陸技術」、「重力天体からの打上げ技術」、そして「超遠方での航行技術」、そして「その他打上げ・軌道間輸送のためのクリティカル技術」等の工学的課題に取り組む。
- それらの実証研究を進めることによって、新産業の創出及びコミュニティの育成に努め、輸送系ネットワークの実現に向けた活動を先導する。

■ 今後10年程度の目標

- 高頻度で革新的なミッション創出に向けて、衛星・探査機の小型化・高度化と連動し、基幹ロケットの性能向上・高機能化を目指した研究に取り組む。
- 民間等が主導する宇宙科学・探査以外の打上げ需要と連携し、宇宙輸送の競争力強化(低価格化・高頻度化)のために、宇宙科学のミッション創出およびロケット技術革新の立場から先導する。
- 将来型輸送システムとして、小型飛翔体による観測実験機会の革新のために、高頻度の繰返し運用が可能な再使用型観測ロケット計画/サブオービタル飛行に関する技術革新を押し進める。
- デブリ排出を抑えたキックステージの実証研究と開発によって、将来のイプシロンによる深宇宙空間へのアクセス性向上を押し進める。
- 月軌道ゲートウェイ等の国際宇宙探査の機会を有効に利用した宇宙航行・輸送の実証研究を押し進める。

3. 宇宙工学分野の将来構想(3/3)

衛星・探査機および深宇宙探査に関する将来構想

■ 日本が採るべき戦略

- 中型による高度なミッションと小型・超小型によるタイムリーで高頻度なミッションの組み合わせにより、工学的に挑戦的なミッション及び理学的に高価値なミッションを積極的に実行し、日本の存在価値を最大限発揮する。

■ 2040年を視野に入れた目標

- 高度なミッション実現のために、太陽光推進や非化学推進などの革新的な宇宙航行システム、自律化・高機能化などの革新的な衛星探査機アーキテクチャ、地球帰還および目標天体におけるEDL技術・表面探査技術、外惑星領域探査に向けた半永久電源などの最先端技術により、宇宙開発全体を牽引する成果創出を目指す。
- タイムリーで高頻度かつより挑戦的なミッション実現のために、将来の惑星探査に必須な技術の実証、その成果に基づくフラグシップ探査計画の策定と実行、超小型ミッションの促進による新たなプレイヤー獲得・コミュニティの育成を図る。
- 国際協力による補完関係を生かしたミッションや、科学以外の動機によるミッションにも積極的に参画する。

■ 今後10年程度の目標

- はやぶさ2、BepiColombo、SLIM、XRISM、MMX、DESTINY⁺、LiteBIRD、SILVIA等を着実に実施する。
- EQUULEUS、OMOTENASHI、Comet Interceptor等の超小型探査機による高頻度な宇宙科学・探査ミッションを展開する。
- 高度なミッション実現のために、EDL・表面探査技術・可逆展開ラジエータ・ターボ符号導入・半永久電源、タイムリーかつ高頻度化のための小型MEMS-IRU・AOCS・軽量薄膜SAP等に重点的に取り組む。
- イプシロンのアビオニクスコンパクト化など、基幹ロケットの検討と連動し、衛星および惑星探査機システム・サブシステムの超小型化・軽量化・高機能化研究へ取り組む。